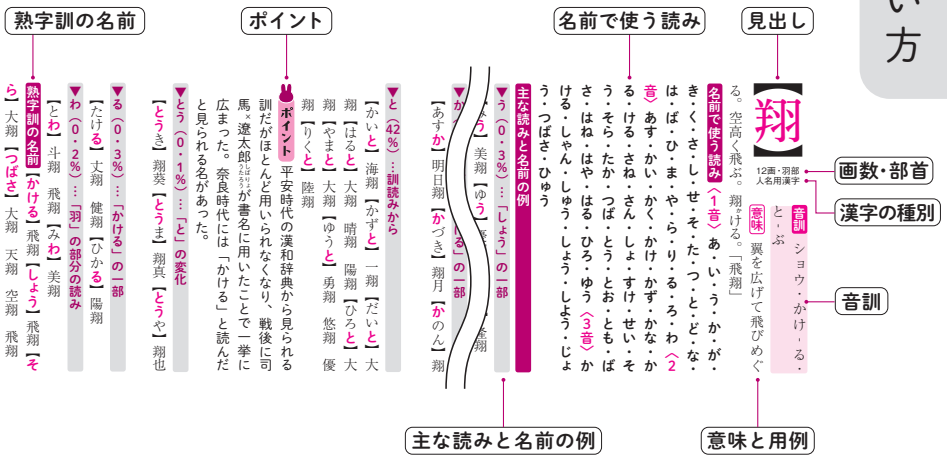
本書の使い方



1 見出し

①見出しの漢字

・名づけに使える漢字二九九九字（二〇二六年五月現在）を収録し、見出しとしました。

・見出しの漢字の配列は次の通りです。

1 代表的な読みの五十音順（代表的な読みは、音読み、または訓読みで一般的と思われるものとしました）。

2 代表的な読みが同じ場合は画数の少ない字→多い字の順。

3 読みも画数も同じ場合は部首に従って配列しました。部首立ては、『新漢語林 第二版』（鎌田正・米山寅太郎 著、大修館書店、二〇一一年）の部首に基づいています。

・見出しの漢字は、【 】で示しました。

・旧字体など、意味や音が同じで形の違う字を名づけに使うことができる場合は、見出しの漢字の下に【 】で示しました。

・「名前で使う読み」欄（→3）に読みを掲げる項目は見出し字を赤字に、それ以外は見出し字を黒字にしました。

②画数・部首

・漢字の総画数を、「○画」と示しました。

・漢字の部首を、「○部」で示しました。

③漢字の種別

・常用漢字、人名用漢字の二種を示しました。

・常用漢字のうち、小学校で習う漢字（教育漢字）は、右側にその漢字を習う学年を示しました。

2 漢字の基本情報

①音訓

・漢字の音読みと訓読みのうち、代表的なものを示しました。音読みはカタカナ、訓読みはひらがなで示し、送り仮名がある場合は‐（ハイフン）で区切りました。常用漢字表に掲げられた音訓は太字にしました。

②意味・用例・解説

・現代の日本で使われる意味や名づけで使われる意味を中心に解説しました。

・意味によって漢字の読みが限定される場合は、［ ］で読みを示しました。

・それぞれの意味での用例を「 」で示しました。

・名づけに使えない漢字は、右上に×印を付けました。

・〈地名〉で、その漢字の入った地名の例を示しました。

・◉で、その漢字についての参考情報を示しました。

3 名前で使う読み

・名前で使われることが多い読み、伝統的に名前で使われてきた読みを掲げました（→巻頭7ページ）。

・読みの音の数ごとに、〈○音〉で示しました。「しゅん」の「ゅ」、「てっ」の「っ」などは一音と数えました。

・読みは、五十音順で並べました。

4 主な読みと名前の例

①主な読み

・「名前で使う読み」に取り上げた読みのうち、代表的なものを▼で取り上げました。

・▼の配列は、読みの五十音順としました。

・その読みが、見出しの漢字のすべての読み（本書で掲げる読み）の中で占める人数の割合を、（○%）で示しました。割合は、次のルールで示しました。

10%以上…小数点以下を四捨五入

10%未満…小数点第一位まで掲載

0・1%未満…小数点第二位まで掲載

・その読みがなぜそう読まれるのかという理由を、…の後に簡潔に示しました。複数の理由が考えられる場合は、代表的なものを示しました。

②名前の例

・漢字の読みごとに、名前の一例を挙げました。

・名前の読みを【 】で示し、見出しの漢字の読みを赤字にしました。名前の読みは五十音順に並べました。

・同じ読みの名前例は、一字目の画数の少ないもの→多いもの、二字目の画数の少ないもの→多いもの……で配列しました。画数が同じ場合は部首の順に並べました。

5 熟字訓の名前

・熟字訓（「飛鳥（あすか）」「日向（ひなた）」など二字以上の組み合わせで読むもの）の名前の一例を挙げました。名前の読みは【　】で示しました。
・配列は、読みの五十音順としました。
・読みが同じ名前は、一字目の画数の少ないもの→多いもの、二字目の画数の少ないもの→多いもの……としました。画数が同じ場合は部首の順に並べました。

6 ポイント

・「主な読みと名前の例」「熟字訓」に関わる解説がある場合は、ポイントとして示しました。

7 索引

・検索の便を図るため、巻頭に「漢字の画数索引」、巻末に「漢字の読み索引」を設けました。

※画数や部首は辞典などによって異なることがあります。本書は『新漢語林 第二版』の記述を元にしました。

■本書で使用する用語

【音読み】中国から伝わって日本語化した読み方。「光」の「コウ」など。

【訓読み】漢字の意味内容を主に日本語の読み方で読んだもの。「光」の「ひかり」「ひか-る」など。

【訓義】漢字の訓読みと意味。

【慣用音】本来の読みではないが、日本で一般に通用している漢字の音読み。

【熟字訓】「向日葵（ひまわり）」「紅葉（もみじ）」など、二字以上の熟語をまとめて訓読みにすること。

【部分音／部分音訓／部分訓】読みの一部を使った読み。「葵（あおい）」の「あ」「い」など。

【歴史的仮名遣い（旧仮名遣い）】平安時代中期以前の文献を基準として定められた仮名遣い。

【旧字体／異体字】「真」に対する「眞」、「桜」に対する「櫻」、「凜」に対する「凛」のように、普段使われるのとは別の字体。

【類形異字】「巳」と「已」など、別の字だが形が似ている漢字。

【部分字体】「稀」に対する「希」、「柊」に対する「冬」など、漢字を構成する部分。

【代用】音読みが同じ別字の読みを使うこと。

【転用】別の字の読みを使うこと。

【同音】同じ音読み。中国の字音では別のものも含む。

『実例で読み解く名前の漢字辞典』について

『実例で読み解く名前の漢字辞典』は、名づけに使える漢字二九九九字（二〇二六年五月現在）すべてを取り上げ、読みや意味、画数、名前例などを解説する辞典です。

1 本書が活用したデータについて

本書では、著者が公益財団法人日本漢字能力検定協会の協力を得て、受検者の名前を個人が特定されない形にしたデータ（漢検受検者人名データ［２０２５調査］）をもとに、名前の漢字と読みの関係を分析し、収録しました。

①調査対象

二〇一三年第一回検定から二〇二三年第一回検定を受検した一一年分の受検者の名前（姓から切り離すなど、個人の特定がなされないための処理を経て提供された文字・言語としての電子情報、平均年齢二三歳）

②件数

延べ１９，０６０，８４６件（同一受検者の重複を除き８，４８６，１５０件）。漢字を含む名の表記と読み仮名が一致する名を一つとしてカウント

③名の種類

６３１，８３２種（漢字を含む名の表記＋読み仮名。外国人の名も含みます）

④調査対象の漢字

常用漢字と人名用漢字の二九九九字。

⑤漢字とその読みの分析方法

データでは、名前全体に読みが振られていたため、漢字一字ずつの読みに分ける処理を行いました。複数の分け方が考えられる場合は、原則としてより自然な方を採用しました。

2「名前で使う読み」について

・「名前で使う読み」は、次の基準で選定しました。
＊従来の漢和辞典で取り上げられてきた読み。
＊漢検受検者人名データ［２０２５調査］で、一〇件以上または、その漢字の使用件数に占める件数が０．１％以上の読み。
・その他、次のような基準で選定・収録を行いました。
＊読みが「ン」一音のものは収録する。読みが「ン」からはじまる二音以上のもの、「ァ」「ッ」などの小字からはじまるものは収録しない。
＊「ジョー」など読みに長音（ー）を含むものは「じょう」のように母音の読みにまとめる。

＊「カズ」と「カヅ」など、仮名遣いの別は異なるものとして扱う。

＊「光（グァン）」「和（ファ）」など、外国語由来の読みも収録する。

＊旧字体など、意味や音が同じで形の違う字の読みは、新字体などとまとめて扱う。

＊熟字訓など、漢字一字ずつに読みを分けにくいものは「熟字訓」欄で扱う。

3 本書で取り上げる名前の例

・本書に掲載する名前例はデータに基づく実例です。

・名前の例はデータで件数が多いものを中心に収録しました。

4 漢字の読み方の理由

・「主な読みと名前の例」で解説する読み方の理由として、次のようなものを挙げました。複数の理由が考えられる場合もありますが、ここでは主な理由を一つずつ挙げました。

・読み方の理由に詳細な解説がある場合は、「ポイント」欄に収録しました。

①音読み

【例】亜（あ）…音読み
梓（し）…音読み

②訓読み

【例】嵐（あらし）…訓読み
亜（つぐ）…訓読みから
遠（とお）…訓読みから
逢（あい）…訓読みから

③一部（読みの一部を使用する読み）

＊このような読みを、本書では「部分音」「部分訓」「部分音訓」とも呼びます。

【例】葵（あ）…「あおい」の一部
葵（い）…「あおい」の一部
葵（あい）…「あおい」の一部
葵（あお）…「あおい」の一部

④変化（読みが変化したもの・読みに新しい音（おと）が加わるもの）

【例】愛（あき）…「あい」の変化
偉（いっ）…「い」の変化
温（のん）…「おん」の変化
逢（おう）…「あう」の変化

⑤「○○」から（古語や外国語からの外来語の一部、熟字訓の一部などを使用する読み）

【例】愛（かな）…古語「愛（かな）し」から
愛（ら）…英語「ラブ」から
綺（きら）…「綺羅（きら）」から

⑥「○○」の「○」（熟語などで見かける読み）

【例】愛（まな）…「愛（まな）弟子」の「まな」
榛（はる）…地名「榛名（はるな）」の「はる」

⑦意味から

【例】曖（くら）…暗いの意味から
輝（きら）…きらきら輝くの意味から
真（み）…古典の身という意味から

⑧濁音化／清音化（主に連濁で濁音になるもの／濁音が清音になるもの）

【例】菊（ぎく）…「きく」の濁音化
芽（か）…「が」の清音化

⑨旧仮名遣い

【例】梓（あづさ）…「あずさ」の旧仮名遣い

⑩転用（字形が似ている別字の読みを使うもの）

＊字形が似ている別字を本書では「類形異字」と呼びます。

【例】已（み）…類形異字「巳（み）」の転用

⑪名前で使われてきた読み（これまでの漢和辞典などで取り上げられてきた読み）

【例】勇（はや）…名前で使われてきた読み
和（かず）…名前で使われてきた読み

⑫連想（連想による読み）

【例】花（はる）…花→春の連想
空（たか）…空→高いの連想
翔（つばさ）…翔（飛ぶ）→翼の連想

⑬連想から（連想による読みの一部を使用するもの）

【例】花（ら）…「桜（さく）」の連想から

⑭熟字訓から（熟字訓の読みの一部を使用するもの）

【例】海（うな）…熟字訓「海原（うなばら）」から
海（あ）…熟字訓「海女（あま）」から

⑮部分の読み（漢字のパーツの読みで読むもの）

＊本書では漢字のパーツ（漢字を構成する部分）を「部分字体」とも呼びます。

【例】稀（のぞみ）…「希」の部分の読み
泉（みず）…「水」の部分の読み

⑯対義語から

【例】都（さと）…対義語「里」からか

【参考文献】
荒木良造編（一九八八）『名乗辞典』二七版、東京堂出版
池上禎造（一九八四）『漢語研究の構想』岩波書店
加納喜光（二〇二一）『人名の漢字語源辞典 新装版』東京堂出版
佐藤喜代治（一九九六）『漢字百科大事典』明治書院
佐藤喜代治（一九八五）『字義字訓辞典』角川書店
笹原宏之（二〇〇六）『日本の漢字』岩波書店
笹原宏之（二〇〇五）『氏名の史実・現実―世界と日本の名前のはなし―』恒春閣
築島裕編（二〇〇七～二〇〇九）『訓点語彙集成1～8』汲古書院
東京堂出版編集部（一九九二）『名前の読み方辞典』再版、東京堂書店
宗福邦、陳世鐃、蕭海波主編（二〇〇七）『故訓匯纂』商務印書館
諸橋轍次著 鎌田正、米山寅太郎修訂増補（二〇〇〇）『大漢和辞典』大修館書店
鎌田正、米山寅太郎著（二〇一一）『新漢語林 第二版』大修館書店